惠空の「他力の六義についての、宗先生の講義録（二種あり）

編集　大竹　功

5　恵空の「他力の六義」についての、宗先生の講義録（二種あり）

（1）横浜市高明寺の聞法会の記録から。　（転載許可：令和三年（二〇二一年）八月四日）

リンク先　http://komyoji-neo-buddhism.net/node/66

このリンク先は、変更になる可能性があります。ご注意ください。（高明寺住職からの伝言）

他力ということ

一九九九年一一月二七日　更新　（このホームページの本文は横書きです）

「他力」という、真宗の基本概念について、お教えをいただこうと思います。

他力の六義（宗正元先生のご法話より）

真宗大谷派の初代講師（大谷派には、講師・次講・擬講・学士の四段階の学位がある）である恵空師が、他力の意義が混乱することを心配して、「他力の六義」ということを明らかにして、教えて下さっている。（『諸仏慈悲集』）。

一、内熏密益

私どもの内に染み付いている神秘的なはたらき。

今日のことばでは、宇宙の大生命。霊力。精霊。

「いろいろなものに生かされているのだ」と。

生かされて、というが、どういう風に、という内容によっていろいろ出てくる。

弥陀の本願は、私どもを無我の主体として確立する。

二、世間因果

縁の力を他力と考える。縁によって結ばれ、縁によって別れる。その縁の方を他力と。

植物の芽が出るには、太陽の光とか土とかが必要。（水とか気温とかも）

その縁が無ければ、種があっても芽は出ない、と。

私に案ずるに、つぎのようなことも「世間因果」といえるのではないだろうか。

「士は己を知る者のために死し、女子はおのれを喜ぶ者のために装う」という。（中国の古典に出る言葉）

他力の身近な、素朴な現れ。

食事を作るのも、自分ひとりだったら、残り物や適当なもので間に合わせる。でも「おいしい、おいしい」といって喜んでくれる人がいれば、心をこめて作る。

お蔭さま、ということ。

そういう意味の「他者」の力。

私がお話をする。

皆さんがおられる。嫌でも勉強する。みっともない話はできないとか、恥をかきたくない、褒められたい、そういう思いもある。汚れた煩悩。しかしそういうはからいを越えて、事実、学ばせてくださる。

学べば、そういう思いが汚れた煩悩だということを知らされる。おのずと我が身が照らされる。仏法を学ぶというのは、我が身が照らされることだろう。

おのずから照らされていく。自分の思いを超えて。

また自分の思いを超えて我が身が照らされないようなら、仏法を学んでいることにはならない。

聞いてくださる方が、学ばせてくださる。それも「他者」の力。他力。

三、依教起行

人間は、ほっておいても育つというものではない。（＊私に――親はなくても育つかも知れないが、育ててくれる誰かがいなければ赤ん坊は生きられない。）そういうところが動物と違う。動物は、生まれて直ぐ本能がはたらく。（馬は生まれて直ぐ立ち上がる。鳥などは、雛の間は親が餌を運んでくれるが、巣立ちは人間よりずっと早い。人間だけは、一人前になるのにえらく時間がかかる。）人間は、育てられる生きもの。手を取り足を取って。

朝、顔を洗うことも、教えられてそうなる。（＊私に聞思するに――教えてくださる力を他力と考えるのだろう。）

食べ方も、教えられなかったら、どんな食べ方をするか。

何を学んだか、学習の違いによって、衣食住にわたって違いが出てくる。

人間は文化的な環境の中に生まれ出てくるから。

他の生きものは、多少学んだり習ったりすることはあるが、ほとんど本能的。本能で生きていける。

人間はどうしても文化を学ばなければならない。人間は一人では生きられない。それで、他力のお世話にならねばならん、と。

四、慈悲善根

親、先生、先輩のお慈悲。いつくしみを受ける。

そういう風に暮らしている。その慈悲善根を他力という。

五、諸仏本願

現代人はあまり口にしないが、観音さんやお地蔵さんがちゃんと祀られている。
東京タワーの隣の寺（増上寺だろう）、すごい数のお地蔵さん。
仏の加護を受けずにおれない。
たとえば私たちがバイブル（聖書）を読んでいなくても、広い意味で感化を受けている。別に名乗っていなくとも、周りにクリスチャンの方がいる。たとえば三浦綾子さん（遠藤周作さん、曽野綾子さん、高橋たか子さん、小川国夫さんなどなど）のような人が作品を書くと、そういう作品なりエッセイなりに感化を受けたりする。そういう諸々の宗教や思想が長い歴史をもって、われわれに影響を与えている。

こうした五つの理解に対して、恵空師は第六に、

六、弥陀別益

という本義をあげている。上記の五つでは尽くせない、弥陀の本願のみがあらわしている意義。

転成。屍骸を宿さず、ということ。

本当に生かされる。

根本の意義をあらわしてくるような他力が、弥陀の本願において明らかにされる。

われわれが、いのちを見失っている。一番大事なものを失っている。

人間にとって一番大事なものは何か。

念仏のほかなし。つまり、無我の主体を勝ち取る。

親鸞聖人が、学んだり習わなくなったりすることを屍骸とおっしゃられている。生ける屍骸。

屍骸を生き返らせる。それが本願他力。主体を確立する方は、**転成**と言っている。

『真宗聖典』東本願寺版・１９８頁。

理性――凡聖雑修（凡聖所修の雑修・雑善）。（小乗の）さとりを開いた人。二乗雑善の中下の屍骸。

天上界を求める人。人天の虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の屍骸。

欲望――逆謗闡提。

理性でも、宗教的理性、日常的な理性とあるが、宗教的といっても我執がある。

宗教的我。たとえば、カソリックとプロテスタント。宗教的な面では大きな違いがある。もの凄いテロをくりかえしている。アイルランドだけじゃない。

中近東にもすさまじい宗教対立がある。どうしてあんなに争わなければならないかと思うくらい。

理性といっても面倒なもの。無我にならない。

無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る。

叩き壊すということじゃない。どこまでも転ずる。

（高明寺様のホームページにおいての宗先生の「他力の六義」の講義記載はここまで。

文中　（＊私に――云々）は高明寺ホームページの編集者の私見と思われる）

（2）宗先生の「他力の六義」の講義

次は、高明寺様の法話（一九九九年一一月二七日　ホームページ更新）とは別のもの。

まことに遺憾ながら、講義の年月日に記載を、入力した大竹が忘れていました。おそらく、「雲集学舎」か「雲集　夏の聞法会」での講義録だと思います。今ここではホームページに掲載しているわけですから、調査して講義年月　日が判明したら、補正掲載いたします。今のところ、この二講義の前後は不明ですが、二〇〇六年一〇月に入力しているのは確かですが……。

宗先生の講義より

だから他力なんかについてもですね、本願力・他力についてね、恵空という人なんかは「他力の六義」といって、他力を六つの義で明らかにしておるんです。こういうのはね、違いを明らかにしておるわけです。そこに恵空の本がありますけどね、『讃仏慈悲集』という。古本屋に買いに行ったら一万円やった。高いものだね、昔の本というのは。あまりないんですよ、恵空の書いたものはね。この前神田の本屋に出とった。それはどういうのかっていうとですね、恵空という人の表し方はね、

内薫密約の他力
世間因果の他力
依教起行の他力
慈悲善根の他力
諸仏本願の他力
弥陀別益の他力

「**内薫密約**」というのは、まあ結局ですね、私どもは天地の恵みを頂いておると。なんだか私どもにはわからないけれども何か神秘的な力とかね、そういう色々な天地の恵みを頂いて私どもは生かされておると、そういうようなことを表す。それを「他力」という言葉で言い表す場合があると。こういうことですね。

二番目の「**世間因果**」というのは、これは世間の様々な因果を他力と表すと。因が果になる時には縁というものがありましょ。そういうふうにどんなものでも他力に依っておると。それは自分ひとりで大きくなるわけじゃない。果物でもなんでもそうですけどね、土とか太陽とか水とか肥やしとか、そういうものによってやがて実を実らせる。こういうようなことで「世間因果の他力」と。

それから、「**依教起行**」といって、教えに依って行を起こすと。この「教」とか「行」というのは一般的な意味なんですが、私どもが何かを行うという場合にはですね、教えられて行う。あるいは命じられて行うとかね。絶えずそういうものでしょ。御飯を食べなさいとこういわれて御飯を食べるとか。顔を洗いなさいといわれて顔を洗うようになるとかね。そういうようなことを他力と。我々は、顔を洗うようになったのも自力じゃない、他力だと。「顔洗え、顔洗え」といわれてですね、いつも顔を洗うように命じられて顔を洗うようになった。

この頃は御飯も勝手に食べたりしてますけどね、ひと昔前ですと、ちゃんと決まった時間に、しかもそれも一日に三回食べなきゃならなかった。「食べよ食べよ」といって叱られるんですから。もし食べないと、おやつはやらんと。おやつを食べすぎて食べられないんだろうから、もうおやつはやらないと。つまり朝昼晩の三回食べないとですね、もうおやつもなにも貰えなかったです。ま、そういうようなかたちで三度々々食事をするという。お腹が空いたら食べると、そんなんじゃなかった。食べよと命じられて食べとった（笑）。遊びたくてしようがなくても、その時は帰らないとですね。まあ今はそういう食事については、えらい時代が変わりましたけども。とにかくそういうようなことを言うんですわ、「依教起行の他力」

というのはね。教に依って行を起こすと。

それから「**慈悲善根**」。まあ慈悲、それを他力と。いろいろな慈悲によって育てられたりする。慈悲にも色々な慈悲がありますけどね。親の慈悲とか世間の人々の慈悲とか仏の慈悲とか、要するにそういう慈悲一般をですね、他力と。それから「**諸仏の本願**」を他力で表す場合。「諸仏に助けられて」という場合の、そういう諸仏の力をですね、他力と。それから最後に、その諸仏の本願と区別して、阿弥陀の本願を他力と（「**弥陀別益の他力**」）。

だから恵空なんかがこういう区別を立てるのは、阿弥陀の本願力といえば、内薫密約の他力・世間因果の他力・依教起行の他力・慈悲善根の他力・諸仏本願の他力、こういうものから区別されるんだと。つまり阿弥陀の本願力というのは、我々を浄土に生まれさせ、更にその浄土から穢土に向かわせるというようなそういう力ね。内薫密約・世間因果・依教起行・慈悲善根・諸仏本願、こういう意味での他力というものはね、他力は他力でも、別に我々を浄土に生まれさせ更に浄土から穢土へ向かわせるという、そんな意味の力じゃありませんわね。だから阿弥陀の本願力を明らかにするという意味で、こういうふうに区別する。まあこういうようなことが一つの教学のすがたです。

（講義の引文は以上）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なお、ここでの恵空の表記は、「恵空」（「恵空」）「慧空」を混用しておりますが、「恵空」は「恵空」の新漢字体表記で同じ文字という認識です。また「恵空」「慧空」の混用は、恵空自身がしておりまして、厳密な使い分けははっきりしていません。ここでは主に「恵空」を使っておりますが、混用そのものはお許しいただきたいと存じます。（大竹）